

子どもの発達と絵本

—子どもと絵本との出会いについての—考察—

Child Development and Storybook Reading

谷 川 賀 苗

Kanae Tanigawa

1. はじめに

本研究の目的は、絵本が子どもの発達に、どのような意味をもつかということを明らかにすることである。赤ちゃんが絵本と出会うことについて、ドロシー・バトラー（2002）は、次のように述べている。「本は、赤ちゃんときから、子どもの人生に何よりも大きな役割をになうべきであると、私は信じています。親やまわりの大人の助けを得て本に親しむことは、子どもが、幸せで前向きな人間になる可能性を大きくします。」彼女自身、娘のクシュラにたくさんの絵本を与え、幼子が絵本をはじめとするたくさんの本との出会いを通して、豊かな人生を歩んだ道のりを記録としてまとめている（バトラー, 1984）。

日本においては、2000年に「子ども読書年」が設けられ、以来「子どもの読書活動の推進に関する法律」（2001年12月）が公布された。この法律に基づき各市町村においても子どもの読書活動を推進する計画について具体的なプログラムが実施されている。その中の一つに、2000年から赤ちゃんとお母さんを対象に実施された「ブックスタート」というプログラムがある。これは、1992年、すべての赤ちゃんに絵本を手渡すというイギリス・バーミンガム市において試みられたブックスタート・読書推進プログラムを、日本の行政が取り入れたものである。具体的には、新生児の定期健康診断の際に、保健所や保健センターにおいて、保健師と図書館員と子育て支援のボランティアが協力し、と専門家によって選ばれた赤ちゃんの絵本のリストから2冊ずつさらに選び、赤ちゃんとお母さんさんに配布される。お母さんと赤ちゃんがともに絵本を読む体験を持つことによって、そこに「楽しみ」を見出して欲しい、子育ての楽しさを実感してほしいということが、この「ブックスタート」の趣旨である。2002年・平成13年度事業として36市町村、2003年・平成14年度事業として320市町村、2004年・平成15年度事業として582市町村がこのプログラムを実施した。幼児期における絵本との出会いが、子どもの読書への関心の広がりに影響を与えるということについて、一連のこれまで行われた調査研究の結果が、このプログラムを背後から支持している（Arnold, et.al. 1994）。

子どもの発達と読書環境についての研究（秋田, 1998、Bus, A. 2003）は、子どもが本を読むという営みを通して、本に紡がれている内容を楽しむだけにとどまらず、自らが行っている活動に意味を見出し、自分を取り巻く環境への理解に深くつながるものであることを明らかにしている。さまざまな年齢の子どもたちを対象とした研究がこのテーマについて行われているが、とりわけ、幼児期については、この時期に築かれる養育者と子どもの関係の安定度が、絵本をとして親と子の間でのやり取りがあるか否かで違いがあることを見出している（Bus, A. 2003）。足立（2003）は、読書推進活動の自らの体験を通して、幼児期に大切な「3つの体験」が、絵本を子どもに読み聞かせることによりたっぷりとできると語っている。この「3つの体験」とは、まず、本当に愛されている存在であると思える「愛情体験」、次に、共に楽しさやその場の空気を感じあう「共感体験」、そして3つ目は、子ども自身が自分をポジティブに認めることのできる「自尊体験」である。身近にいる人に抱かれ、ひざの上に乗る心ぬくもりを体感しながら、「愛されている」ことを確認でき、そして、絵本のお話について感動を分かち合い、さらに絵本に描かれている内容を子どもが自分の中にとりいれながら子どもが自分自身をすばらしいと思えることが絵本の読み聞かせを通してできる。

本研究では、子どもの発達と絵本という広大なテーマの中から、特に、子どもがどのようにして、絵本に出会っているのか、そして子どもがその絵本との出会いを通して、何を自らの成長に取り入れているのかについて考えてみる。具体的には、次の3つ問いについて考えてみたい。

- ① 図書館や書店において、子どもがどのように本を選んでいるのだろうか
- ② 家庭での、読み聞かせは何歳くらいから行われているのだろうか。そして、養育者はこの読み聞かせを何歳くらいまで行うのが適当と考えているのだろうか
- ③ 親と子どもと一緒に絵本を読む風景から、子どもと絵本の出会いを考える

2. 子どもは読む本をどのように選んでいるのだろう

子どもと本との出会いを、子どもが読む本を、どのように選んでいるかというプロセスに焦点を当て考える。親子で図書館や書店の絵本や児童書コーナーを訪れたとき、どのようなやりとりが行われるのだろうか。実際の図書館や書店というフィールドにおいて、この風景を観察し、記述してみる試みから子どもがどのように本を選んでいるかを調べた。

つぎにとり上げるいくつかのケースは、T大学社会心理学実験実習の「観察法」の実習の一環として行われ、学生が観察した図書館や書店での本をめぐっての子どもと大人の風景である。それぞれの観察をレポートにまとめたものなかから、一部をここでは取り上げて、子どもと絵本と出会いについて考える。

<観察1>K市立図書館（日曜日の14：30～15：45）

第1ケース：5歳くらいの男の子二人とそれぞれの子どもの母親

14：30 5歳くらいの男の子二人（仮にここではA君とB君とする）が、それぞれの母親とともに図書館の児童書コーナーに来る。「好きな本を選んで待っていてね」と子どもたちに言って、母親2人は雑誌コーナーの方へ行く。

14：32 A君とB君は、二人一緒に、児童書コーナーをぐるりと一回りしたあと、昆虫図鑑と昆虫の絵本が並べてあるコーナーへ行き、そこにある図鑑や絵本を読み始めた。

14：48 絵本を読み終えたB君は、A君が読んでいた図鑑と一緒に読み始める。

14：55 母親たちが、子どもたちを迎えに来る。B君の母親は、幼児教育の雑誌を持っていた。

子どもたちは、母親たちが迎えに来たことを知ると、読んでいた本を元の位置に戻し、連れ立って図書館を出た。

第2ケース：4歳くらいの女の子と母親

15：05 母親と赤い服を着た4歳くらいの女の子が図書館に来た。母親は、子どもを絵本コーナーに連れて行くと、「お母さんも本をさがしてくるね」と言って、幼児教育の雑誌コーナーの方へ、行ってしまった。

15：07 女の子も母親の後について雑誌コーナーのところまでいったが、すぐにまた絵本コーナーに戻って、絵本を選び始める。

15：12 アンパンマンの絵本に興味を示すが、すぐに本を元にあったところへもどす。

15：15 少し、絵本コーナーをうろうろした後、キティちゃんの英語の本に興味をもち、その本を持って、テーブルのある場所へ移動。

15：17 女の子がテーブル席へ移動したことに気がついた母親は、自分もそこに行き、子どもの横で幼児教育の雑誌を読み始める。

- 15：23 子どもが本を読み終え、本をもってうろうろし始める。
- 15：25 子どもが、持っていた本を元の位置へ戻し、新しい本を選び始める。
- 15：29 子どもは動物の写真が載っている絵本に興味を示し、象の写真が載っている本を持って母親のいるテーブルへ戻る。
- 15：32 母親は、子どもをその場に残し、読んでいた雑誌を元の場所に戻しに行く。
子どもは、自分が選んで持ってきた本を楽しそうに眺めていた。
- 15：38 子どもは、本を読み終えたので、本をもってうろうろし始める。
- 15：40 子どもは、持っていた本を下の棚へ戻し、児童書コーナーの中をうろうろ歩き始める。
- 15：41 子どもは、キリンの写真が載っている本に興味を示す。
テーブルには行かずに、その場所に座り込んで、本を読み始める。
- 15：45 母親が、その場所に子どもを迎えに来る。母親は、かずの勉強についての本を持っていた。
子どもは、見ていたキリンの写真が載っている本とキャラクターが載っている絵本を選び、貸し出しの手続きをした後、2人で帰っていった。

この2つのケースの観察を行った学生は、図書館という空間において、子どもは自由に本を選んでいくという感想を述べている。貸し出される本の冊数も複数冊ということで、親は自分の選んだ本を子どもに薦めるが押しつけるという態度ではなかったと観察レポートに報告している。

子どもがどのように本を選んでいるかについては、子どもは本の表紙を参考にしているケースが多いと報告している。ここで取り上げられた以外の場合にも頻繁にこのことが観察された。子どもたちは、アンパンマンやキティちゃんなどのキャラクターに、興味関心を示す傾向が見られた。

一方、親の本の選択については、内容についての関心が強く、絵本についても、数や文字について勉強できるような内容の本を選択する傾向が見られた。

<観察2> 平日の書店 (16:11~16:55)

第1ケース：5歳くらいの男の子と母親

16:11 児童書コーナーのあたりで、男の子は、児童書を読み始め、母親はその近くで絵本を選び始める

16:14 母親が男の子に自分が選んだ絵本を薦める。
男の子は、母親が選んだ本についてあまり関心を示していない様子。

16:15 二人は、いったん児童書・絵本のコーナーを離れる。

16:16 しかし、すぐにまた戻ってきて、どのような本を購入するかについて相談し始める。
男の子は自分が選んだ児童書を買いたいらしいことが会話の内容から伺える。二人は、話し合いの結果、お手伝いをするという条件つきで、本を購入することにする。

16:18 男の子が選んだ児童書を1冊購入し、書店を出る。

第2ケース：6歳くらいの男の子、3歳くらいの女の子、父親、母親

16:37 男の子が1人で、絵本コーナーに来て、児童書を読み始める。

16:42 男の子は、その場を離れ、親を呼びに行く

16:44 男の子は、父親、母親、3歳くらいの女の子と共に絵本コーナーにもどってくる。
男の子は、母親に「この本買って」とねだるか、母親は「ダメ」と言う。男の子は、それでもしばらく諦めずに、母親に本の購入をねだっていた。その間、父親が妹の面倒を見ていた。

16:46 男の子は、母親に説得され、自分が選んだ本を買うことを諦め、親子4人で書店を出る。

第3ケース：3歳くらいの女の子、赤ちゃん、母親

16：44 女の子が絵本を読み始め、その横で母親も絵本を何冊も手に取りながら読み始める。

16：46 女の子は、ベビーカーに乗っている赤ちゃんに絵本を見せて、読み聞かせを始める。

それに気がついた母親は、「えらいね」と女の子に声をかける。女の子は、しばらくのあいだ赤ちゃんに絵本を読み聞かせていたが、飽きるとまた一人で絵本を読み始める。

16：48 女の子と母親は、ベビーカーを押して、一度絵本コーナーを離れる。

16：51 再び、絵本コーナーに戻り、女の子と母親は絵本を読み始める。

16：53 女の子は自分が選んだ絵本を買ってほしいと母親にねだると、母親は承諾する。

16：55 女の子は、自分が選んだ絵本を1冊購入し、母親とともに書店を出る。

書店の絵本・児童書コーナーにおいて、3つのケースの観察をおこなったこの学生は、レポートで次のような考察を行っている。親は子どもが選んだ本を、時には条件をつけるものの、購入している。書店では、図書館での状況とは異なり貸し出しではなく、本は購入しなければならない。親は自分が選んだ本を買い与えるのではなく、子どもが自発的に見たいあるいは読みたいという絵本や児童書を購入している傾向が観察された。

ここでは、図書館や書店での絵本や児童書に関する親子の間の会話や行動に関するいくつかの事例を取り上げることにより、子どもが本にどのように出会っているかについて考えた。

子どもが若い年齢であったり、未就学児の場合、本と出会えるのは親や身近な人と出かける図書館であったり、書店の絵本・児童書コーナーである。子どもが本をその場で読んだり、貸し出したりまた購入する場合、そこには常に身近な大人とのなんらかの相互作用が見られた。観察を通して、その相互作用には、子どもの年齢による発達の違いだけでなく、それぞれの家庭の特徴があることが明らかにされた。

ここで、とりあげた5組の親子の場合も、それぞれの子どもの本の好みがあり、また、まわりの大人の本に対する考え方も一様でないことが観察から伺えた。観察の時間や場所がランダムであるため、まとめることはむずかしい。ただ、示唆的であるのは、子ども主導型か親主導型かと

いう本を選ぶスタイルは異なるものの、その間に見られた相互作用の内容である。あくまで観察法によるもので、詳細までは明らかにすることは難しいが、この子どもと大人の間で交わされた会話やその会話を受けての子どもや大人の行動に注目することは、これからの研究課題である。幼い子どもを取り巻く読書環境を考える場合、幼子が本と出会う状況で、まわりの大人と相互作用があるのか。この相互作用の内容により、より子どもと本が結びつきをふかめるのではないだろうか。

今後の検討課題として、調査法も厳密に選びながら、子どもが本を選ぶ際に、まわりの大人とどのような会話（時に交渉）がもたれ、その後の子どもと本との関係にどのような影響が及んだかを言及してゆきたい。

3. 子どもと絵本～家庭での読み聞かせ環境を考える

幼児期に、ひざの上で本を読んであげることの大切さが認識されるようになった。子どもは、お父さんやお母さんのぬくもりを感じながら、物語りに彩られて内容を共有することで、安らかに時間を過ごすことができる。そして、物語の中に足を踏み入れ、いつでもまたもどってこられる場所があることを感覚的に覚えることで心を安定させる。

幼児は、どのような本を、誰に、どのくらい読んでもらっているのだろうか。幼児を取り巻く社会環境は、めまぐるしく変化している。おびただしい量の情報が、一瞬のうちにこれらの情報が発信され、世界のどの地域を問わずに受信可能という情報化社会の下で、読み聞かせはどのように行われているのだろうか。

幼稚園児の家庭での読み聞かせ環境を調査することにより、家庭における子どもの発達と絵本の位置づけについて取り上げた。

① 調査の概要

- 1) 調査対象者：大阪市城東区の私立カソリック系S幼稚園に子どもを通わせている保護者 132名に園を通して、協力していただいた。
- 2) 調査期間：2004年9月1日から9月20日
- 3) 調査内容：「あなたは、お子さまに何歳のときから、おうちで絵本を読んであげてますか」「あなたは、お子さまに絵本を読んであげるのは何歳からが理想だとお考えですか」など、家庭での絵本の読み聞かせについての質問

- ② 集計結果～今回の調査では、保護者の絵本の読み聞かせの考えや、実際の生活空間のなかで、絵本の入手方法や読み聞かせの時間など詳細に尋ねた。本研究テーマの中では、広範囲にわたりとりあげることが難しい質問内容も含まれるため、全体の報告書は別途あらためてまとめる予定である。特にここでは、家庭において、保護者自身が、子どもに絵本を

読んであげることについての考えを尋ねた質問3項目：（1）子どもが何歳の時から、おうちで絵本を読み始めたか （2）子どもに何歳から、絵本をよんであげるのが理想であるか （3）子どもが何歳まで、絵本を読んであげるかをとり上げて報告する。

（1）子どもが何歳の時から、おうちで絵本を読み始めたか

0歳児の時から	110人	(83.3%)
1歳児の時から	20人	(15.1%)
2歳児の時から	0人	(0%)
その他（妊娠中から）	2人	(1.5%)
計	132人	(100%)

全体の83%が、子どもが1歳になるまでに絵本との出会いの機会を作っていることが明らかになった。秋田（2004）によると、「読書環境」をいう言葉を鍵にして子どもの読書を語った本は、1998年まではなかったが、現在ではさまざまところで使われるようになっている。すでに、述べたように、2000年に設けられた「子ども読書年」以来の行政の読書推進の動きも各地域で具体的な活動として現れている。絵本を通して、親子のコミュニケーションを図ること、乳児期の時から絵本と触れ合う経験をもたせたいという養育者の気持ちがこの結果から伺える。

（2）子どもに何歳から、絵本を読んであげるのが理想であるか

0～1歳児の時から	110人	(83.3%)
2歳児の時から	22人	(16.7%)
計	132人	(100%)

できるだけ早い時期に、子どもに絵本との出会いを作りたいという考えが、全体の8割強あることが、この回答から明らかになった。多くの保護者は、0歳から1歳の間に、子どもに絵本を読んであげることが理想と考えていた。そして、おそくとも2歳までには、絵本とのふれあいがあることが理想と考えられていた。

(3) 子どもが何歳ごろまで、絵本をよんであげるか

5歳ごろまで	3人	(2.2%)
6歳ごろまで	37人	(28%)
7歳ごろまで	22人	(16.7%)
8歳ごろまで	25人	(18.9%)
9歳～	45人	(34%)
計	132人	(100%)

子どもが何歳になるまで、絵本を読んであげるかについては、全体の約65.9%が、低学年（8歳ごろまで）という考えであることが明らかになった。ひらがな、カタカナそしてわずかな漢字を習得する低学年において、保護者たちは、子どもは自分で文字を読むことが出来るから、本を一人で読むだろうと考えているのだろう。他方、子どもが9歳以上、もしくは子どもがもう一人で読みたいというまで、親は子どもが望めば読み聞かせを続けるという考えが3割強あることがわかった。この質問では、自由に考えを記述する欄を設けた。子どもが9歳になっても、親としては読み聞かせを続けたいという項目を選択された保護者のなかに、子どもは何歳になっても本を読んでもらいたいと思うので、子どもが自分で読むというまでは、ずっと読み聞かせを続けてゆきたいと記述されたものもあった。子どもに何歳まで読み聞かせを続けるかはそれぞれの家庭の考えが反映される。子ども文字を読める能力があることと、一人で本を読むことの間には、必ずしも特定の年齢があるわけではない。ただ、子どもの発達によって、本の内容が子どもを不安がらせるようなものであれば、子どもは、その本を誰かに読んでもらうことにより、一人で不安にならずに、内容をより深く理解できるであろう。この絵本を一緒に読むことについては、村中（2002）が、絵本をだれかと共に読むことの広がり深さを事例とともに述べている。

ここでは、子どもを取り巻く読書環境の実態を捉える目的で、親として読み聞かせをどのように考えているかを幼稚園に子どもを通わせる保護者の考えを調査した。読み聞かせの時期は、こどもの年齢がかなり低いところから行われることが理想と考えられ、また、実際にその年齢時には、読み聞かせが行われていた。この子どもの読書環境についての意識の高さは、この調査が大都市の私立の幼稚園で、母親がフルタイムで働いている率が低いという環境も重ねて考える必要もあると思われる。

今回ここで報告した結果の中で、興味深いのは、読み聞かせをスタートする時期については、こどもが乳児期である傾向が強く見られる一方で、読み聞かせをいつ頃まで行うかについては、子どもが小学校でひらがなやカタカナや160字程度を習う低学年までと答える家庭が6割強あったことである。また、全体の中では、子どもの年齢に関係なく読み聞かせを続ける家庭が、約3割強見られた。読み聞かせのスタートは、子どもがまだ乳児であることが共通するが、そののち

の子どもを取り巻く本の環境では、保護者の考えにより大きく考えが分かれた。子どもが発達の階段を上る時、積極的に子どもに本との出会いを作るという読書環境与えられるか否かが、子どもの心の成長にどのように影響を及ぼすか、今後興味ある研究課題である。幼児期に、まわりによって整えられた読書環境が、年齢的な発達により変容してゆくことが、子どもと本との長期的な関わりにどのように影響するのか、親や養育者の読者についての考え方・教育観と重ねて、検討課題にしたい。

4. 子どもと絵本を読んでもみる一家庭における読み聞かせの風景

それぞれの家庭での読み聞かせのスタイルは、一様ではない。また、個々の子どもの発達的な変化によっても異なる。家庭における読み聞かせの風景を捉えることが目的で、上記の3で行った調査時に、家庭での読み聞かせの場面をテープに録音させてもらえるかどうかを問い合わせた。その結果、スケジュールや協力内容について理解を得ることができた4組の親子に協力していただけた。

特別なことではなく、日常それぞれの家庭で行われている読み聞かせの状況を浮かび上がらせることができたかと考えた。そこで、協力いただけるそれぞれのご家庭に録音テープを預け、自由に何冊でも絵本を読んだことを録音していただくようお願いした。この調査は、2004年11月から2005年1月初旬に行った。

下記のそれぞれの読み聞かせの会話で、地の文とはお母さんが絵本の本文を子どもに声に出して読み聞かせていることを示している。

<ケース1 母親と女子3歳11ヶ月*> *2004年11月時点

『ぐるんぱのようちえん』(西内みなみ 作、堀内誠一 絵)

母：『ぐるんぱのようちえん』 はじまりはじまり

子：ゆかちゃん これ読むわ (といって絵本のタイトルを指差し、文字を一つ一つ押さえながら声に出す)

ぐ る ん ぱ の よ う ち え ん

地の文* (第1場面)

ぐるんばは、とうても おおきなぞう ずうっと ひとりぼっちで くらしてきたので、すぐきたなくて くさいい においもします
ひとりぼっちの ぐるんばな、ときどき「さみしいな さみしいな」といって、みみをくさにこすりつけました。
すると、おおきなみだが ぐるんばの はなを つーっと ながれておちました。

子：ぼたぼたぼた

地の文 (第2場面)

じゃんぐるでは、ぐるんばをかこんで、いま かいぎのまっさいちゅう。
ぐるんばが くさいいので、みんなはなを そらにむけます。
としよりのぞうが いいました。
「ぐるんばは おおきくなったのに いつも ぶらぶらしている」
わかいぞうも いいました。
「それに ときどき めそめぞなくよ」
「では、はたらきに だそう」
「さんせーい、さんせーい」

子：ここようちえん？ (と 挿絵を見ながら)

(お母さんが、かいぎのまっさいちゅうと読んだすぐあとに) まっさいちゅう (とくりかえす)

(お母さんが 「さんせーい、さんせーい」と読んだすぐあとに) さんせい さんせい (とくりかえす)

地の文 (第5場面)

いちばんはじめに ぐるんばが いったのは、びすけつとやの びーさんのところ

子：びーさんてだれなの

母：びすけつとやのびーさんよ

子：びー？

母：そう。びすけつとをつくるから びーさんなのよ

地の文（第5場面）

ぐるんばは とくべつはりきって おおきなおおきな びすけつとを つくりました。

子：（挿絵のビスケットづくりのようすをみながら）これみーんなびすけつと

母：そう、（挿絵を見ながら）このオーブンで全部焼いたと思うよ

地の文（第8場面）

びーさんは、「もう けっこう」といいました。

ぐるんばは、しょんぼり しょんぼり しょんぼり しょんぼり。

びすけつととおさらとくつとびあのをかかえてでていきました。

子：ぐるんば、こまってる？

母：うーん。こんな大きなピアノをつくってもひかれへんからね。もうけっこうとおこられたのね。

しょんぼりしているね。

子：ないているの

母：ちょっとなきそうかな。

ゆかちゃんは、とっても絵本が大好き。お願いした60分録音テープには、10冊の録音記録が収められてありました。お母さんが絵本を読んでいる時、絵本を見ながら、お話の内容と挿絵からその場面の登場人物のようすを理解しようとしたり、気持ちを想像したりと絵本をとおしていお話が広がっていくというのがゆかちゃん親子の特徴でした。

<ケース2 母親と4歳の男の子>

『ゆうれいとすいか』（くろだ かおる 作　せな けいこ 絵）

地の文（p. 6）だれんだか しらないけれど よく ひえてるね
あー、がまん できない。
だべちゃおー。

子：あかん

母：だめ

子：この人あかん

地の文（p. 10）やいやい、なにしやがる。ひとさまのすいかをたべやがって。
ゆうれいとしてはずかしくないのか！ おう、べんしょうしてもらおう！

子：これがあかんの（と挿絵を指差す）

地の文 おーん おん おん ゆるしてください。あんまり おいしそうだったから つい…
もうしませんから、どうぞ おゆるしをー。

子：やい、やい、やい、やい

地の文 (p. 14) よし、わかった。そのかわり おれのいうことは なんでもきくんだぞ。
ともかく おれの うちまでこい！

子：春、これよむ

地の文 (p. 15) しく しく しく しく

子：しく しく しく しく しくしくしくしく

地の文 このなかに わたしが はいりますから きゅーっと おしだしてください。
ひらり

子：春 よむ。ひらり ひらり

子どもの驚きそのまま伝わってくる春君のテープ。人のスイカをだまって食べてしまったゆうれいに対する反応を、お母さんに伝えたいようすがよくわかった。また、お母さんに読んでもらうのを聞いているだけではなく、自分からも積極的に「春 よむ」という子どもが能動的に参加するようになっていく発達的变化の様子が伺えた。絵本を誰かに読んでもらうということは、それを聞きながら内容が「わかる」というだけではなく、子ども自らが「感じたこと」を他者に伝える相互作用に意味があるのではないだろうか。子どもがどのように絵本の内容を受け止めたかをしっかりとお母さんが受け止めることで、子どもが絵本の中にさらに深く導かれていくことを示唆する。お母さんに絵本を読んでもらうという受身的な立場から、次第に子どもが中心となってゆく親の導きが、春君とお母さんの絵本の時間にみられた。ここでは、親が絵本をよみかせる環境が、次第に子どもを積極的に活動できる場へ導いていた。

<ケース3 母親と3歳の女の子>

『あおくときいろちゃん』（レオ レオーニ 作）

地の文 あおくときいろちゃん

子：あおくときいろちゃん

地の文（場面14） ここかしら

子：さがしてみては ここかしら ここかしら

地の文（場面15） あちこち さがして・・・とうとう まちかどで

子：あ、きろちゃんがいた

地の文（場面29） なくて なくて なきました。ふたりは ぜんぶ なみだになってしまいました。
ました。

子：じゃあ かぞえてみようか 1、2、3、4、5、6、7、8..... 60

母：60、61..... 70

子：70..... 80

母：80..... 90

子：90..... 100

母：お、すごい、100まで数えられたね

子：100の次は

母：101

(具体的なやり取りはここでは省略するが、この後も、親子の間で、数をかぞえるという会話が続き、とうとう200まで数えられた)

テープを録音した後の萌々奈ちゃんのお母さんとのやり取りの中で、次のような手紙が届いた。
〔(一部省略) 今回の読み聞かせのなかで、数への広がりも私も一番おもしろいと思いました。娘は、それまでじっくりと百までの数も数えたことがなく、20位までが精一杯で、それ以上の大きい数は、“いっぱい”という表現をしていました。あれ以来、数に興味をもち、“いっぱい”という表現のかわりに、多くの物がある様子を“250”とか“180”などといった具体的な数で(それでも適当な数えかたではありますが)表す様になりました。また、“あおくんときいろちゃん”の読後では、違う目的でたまたまやった遊びを通して、実際に色を(青と黄)を混ぜて、緑になったことも喜んでいました。他にも赤と青を混ぜたり、色いろな色を混ぜて遊び始め、彼女なりの色の発見もあったようです。子どもって、絵本からいろいろな広がりを見せていくのですね。たぶん、私も気づかないこともいっぱい。ますます、今後、読み聞かせをしてあげたいと思いました。

萌々奈ちゃんが、『あおくんときいろちゃん』の絵本を通して、自分の世界をどんどん広げてゆくことが伝わる読み聞かせの様子であった。そばにいるお母さんが、子どもの絵本を通じて知った未知の世界への冒険への足場を作りをすることにより、子どもは能動的に参加できるようになってゆく。読み聞かせの中で交わされる親と子の対話から、子どもは親の援助を受け、だんだんとひとり立ちできるという発達的变化の歩みを進める。

<ケース4 母親と6歳の女の子>

『はじめてのおつかい』（林 明子 作）

地の文 あるひ、ママが いいました

子：これ みたことあるよ

地の文 「みいちゃん、ひとりで おつかい できるかしら」

「ひとりで！」

みいちゃんは、とびあがりました。

いままで、ひとりで でかけたことなんか、いちどもなかったからです。

「あかちゃんの ぎゅうにゆうがほしいんだけど、ママ ちょっといそがしいの。ひとりであってこられる」

「うん！ みいちゃん、もういつつだもん」

子：まだ、いつつなのにな

母：おかあさん、たいへんなんだね

地の文 そこへ、ともだちのともちゃんがきました。

「どこへ いくの？」

「おつかい。ママにぎゅうにゆうをたのまれたの」

「へえ！」ともちゃんは、めをまるくしました。

「ひとりで？」

「うん」

「へえ！」

ともちゃんは、もっと めをまるくして、いってしまいました。

子：（絵に女の子が2人とうじょうするところを指差して）
ままにぎゅうにゆうたのまれたの、こっちの子なの

母：みいちゃん

子：こっちの子

母：みいちゃんだね

こどもは、繰り返し読んでいる絵本についてもあきることなく興味を示すことがある。瑚都ちゃんにとっても、この『はじめてのおつかい』は前にも読んだ覚えがあるらしい。これまでに読んでもらったことがある絵本について、お話の内容をお母さんに確認しながらページを進めている様子が見える。瑚都ちゃんの関心が、絵と言葉に注目するというところへ広がってゆく様子から、子どもが絵本の何に興味を引かれていくのかということを考えさせられる。絵本のなかの絵と言葉では、必ずしも語られていないことがある。瑚都ちゃんが、絵本の主人公みいちゃんの行動を読みとって、自分と年齢に近いことも理解しているようである。さらに、絵を見て読みとるだけでなく、絵をとおして、お母さんとの会話が広がっている。

家庭における読み聞かせには、それぞれの家庭の固有の特徴がみられる。子どもの年齢、親の読み聞かせについての考え方、子どもの読む本の好みなど、さまざまである。ここでとりあげた4組の親子の読み聞かせにも、明らかに特有のスタイルがあることがわかる。この4組のケーススタディから、絵本を子どもに読む、子どもが親や周りの大人に絵本を読んでもらうということは、絵本の世界の広がりや深さを物語るものとして興味深い。子どもが絵本のどこに関心を示し、それについて親がどのように受け止め、時に一緒にそのことについて語り合うか、さまざまな発見があることを示唆するものである。本を通して対話し、時間と絵本の内容、子どもの心の育みを共有することは、子どもの発達を促す環境づくりと深く結びついているのではないだろうか。

終わりに

本研究では、子どもが本と出会うことについて①子どもはどのように本を選ぶのか②家庭における読み聞かせについての養育者の取り組み③絵本と親子で読むという場面を捉えるという3つ

の視点から取り上げた。

これまで、子どもと本との関係について、読書教育の専門家、保育教育関係者、絵本作家が絵本を読む楽しさ、魅力を紹介し、子どもを本の世界へ導くことに努めてきた。また、現在幼い子どもにむけての、出版物も先に述べた読み聞かせプログラムの推進活動と重なって増え続けている状況である。

このような、子どもと本とのふれあいへの活動の一步で、情報化社会の到来は、大人だけではなく子どもの成長する社会環境に大きな影響をもたらしている。おびただしい量の情報が、世界中どこにいてもいち早く入手できるというグローバルな社会に生きる子どもたちは、大人と同じレベルで同じ情報を得ることが可能になっている。

かならずしも相互作用を前提としない現代の情報化社会という社会環境の下で、親と子が共に本を読む時間と空間を共有するという相互作用を前提とした関係性の意義を、本研究で示唆された結果を踏まえて今後も検討してゆきたいと考える。

引用参考文献

- Arnold,D.S.,Lonigan,C.J.,Whitehurst,G.J.,&Epstein,J.N. 1994 Accelerating language development through picture-book reading:Replication and extension to a videotape training format. *Journal of Educational Psychology*, 86, 235-243.
- 秋田貴代美 1988 子どもの発達と読書環境 国土社
- 秋田貴代美 2004 子どもの発達と本、発達No. 99、Pp. 2~12
- 足立茂美 2003 第2回ブックスタート全国大会報告書、全体フォーラム
- ドロシー・バトラー 2002 赤ちゃんの本棚 0歳から6歳まで のら書店
- ドロシー・バトラー 1984 クシュラの奇跡 1 のら書店
- Bus,A. 2003 Joint carefiver-child storybook reading:A route to literacy development. In Neuman S.&Dickinson,D.(Eds). *Handbook of Early Literacy Research*. New York:The Guilford Press. Pp.179-191
- 村中季衣 2002 お年寄りと絵本をよみあう ぶどう社

<読み聞かせに用いられた絵本>

- あおくとときいろちゃん 作 レオ レオーニ 至光社 1984年
- ぐるんぱのようちえん 作 西内ミナミ 絵 堀内誠一 1966年
- はじめてのおつかい 作 筒井頼子 絵 林 明子 福音館書店 1977年
- .ゆうれいとすいか 作 くらだ かおる 絵 せな けいこ ひかりのくに 1997年

<謝辞>

この研究を実施するにあたり、快く研究の趣旨を理解し、協力して下さった大阪市・S幼稚園の園長先生はじめ園の先生方、保護者と園児の皆さん、T大学の社会心理学実験実習を受講された学生の皆さんに心よりお礼申し上げます。読み聞かせの実際の場面をテープに録音することを快くお引き受け下さった4人のお母さまと子どもたち、貴重な時間と励ましの言葉、本当にありがとうございました。テープを聴きながら、研究をまとめ上げる元気をたっぷり頂きました。